

人間学 2 「北東アジア環境共生プロジェクト」 報告

申 珠莉*

はじめに

日本・中国・韓国の3カ国が、発展するアジアの核となっていることに異論はないであろう。そこで本プロジェクトは、中国や韓国を本学学生が訪問し、都市開発・環境デザイン・市民意識をテーマに、相互認識を深めることを目的とする。研究キーワードは、海外交流／ものづくり／環境対策／中国・韓国・日本／国際理解／環境デザインなどである。

これまでに、2010年開催の上海万博を起爆剤として上海地域がいかなる発展を遂げ、市民意識がどのように変化をしているのか、その他にも上海市に隣接する無錫市にある太湖で深刻化した工業による水質汚染に官民をあげていかなる努力がなされたのかを、そして韓国のソウル市では「デザイン・ソウル」計画によって再開発進められた、都市のハード・ソフト両面からアプローチからこれらがいかに市民意識までもが高められたのかなどを、現地視察と専門家からの意見聴取、学生交流によって調査してきた。

これらの実績から、日本・韓国・中国という北東アジアの3カ国は、その地理的近接性や経済的結びつき、さらには人的交流の活性化などに伴う環境共同体としての共通認識が求められる隣国同士である認識を確かなこととして共有した。そしてこの場合の「環境」とは、大気やエネルギーなどの物理的環境を指すのみでなく、産業化や経済発展に伴う都市環境、少子高齢化と社会保障変化に伴う社会環境、再開発や街づくりに活かされている文化的環境などへと、その認識に関する幅を広げてきた。

このようなこれまでの研究成果を踏まえ2016年度の人間学2では、韓国ソウルにおける研修を通じて、こうした様々な環境共同体としての韓国の諸側面を視察・体験し、また交流を図る活動を9月の3～8日までの5泊6日にわたって実施した。事前の準備として、計3回の事前授業を行い、学生たち自らが環境というキーワードに沿った計画を立て、事前調査に基づく日程を組むなどの自主的参加を促した。その結果、研修現場では効率的な時間管理やスケジュールの履行が可能となるなど、学生らの積極的な参加姿勢は研修の成果にも極めて肯定的な影響

受理日2016年11月23日

*「北東アジア環境共生プロジェクト」全体の担当者は鳥飼行博、金慶珠、申珠莉の3名。

があるものと判断される。具体的な研修日程および主な内容は以下の通りである。

日付	研修日程	内容
9/3	自由研究テーマのプレゼン	各自の専門を踏まえた研究
9/4	清溪川・ソウル中心部視察	ソウル都心の環境デザインと再開発事業
9/5	国民大学学生たちとの合同授業 および学生交流会	国民大学言論情報学部・ 李チャンヒョン教授の講義 「日韓の現状と未来への提言」
9/6	環境デザイン事務所視察	環境デザイン講義とプロセス視察
9/7	韓国の伝統と現在の視察	旧都心・韓国伝統文化の理解 新都心・江南地区など
9/8	自由研究の中間報告	まとめ

1. 清溪川・ソウル中心部視察

ソウル市における清溪川再開発跡地を中心とする都市整備の様子を視察することであった。ソウルの政治・経済・文化の中心地である明洞を起点に、ソウル市庁や光化門広場など旧市街地のサーベイを行った。ソウルは朝鮮王朝からたどればその歴史も600年と長く、宮殿などの伝統的な建造物や日本による植民地支配時代の近代的建物が温存される一方で、その多くを取り壊し、新たな建物や道路の再整備（デザイン・ソウル計画）を急速に実行するなど、ソウル特有の都市計画の工夫が感じられる視察となった。

2. 国民大学との交流

国民大学の言論情報学部・専攻学生ら（指導教員・李元徳教授）との合同授業は、大変興味深いものであった。予定されていた「日韓の現状と未来への提言」というテーマのもと、具体的には韓国の現状と未来に対するイメージを写真とキーワードでプレゼンするイメージ提案という新しい手法での合同授業であった。

日本および韓国では、ともに世界的経済不況のなかで景気低迷や低成長時代への懸念から社会環境に対する展望は決して明るくない。現実的にも雇用状況の量的・質的悪化や階層・世代・男女間の格差問題が顕在化しており、若者の就業や結婚、育児、保育を含めた将来計画が具体的に立てられずに若者の実態にも注目が集まっている。本合同授業ではそうした両国の社会的不安の表象でもあるさまざまな問題を取り上げながら、若者の現状と未来に対する考えなど有意義な意見交換を通じて何が異なりどんな点が共通しているのかなどお互いを分かり合えるキッカケづくりとなった。そして社会のあり方の相違についても理解することのできる大変興味深いものであった。



資料1 清溪川復元事業



資料2 国民大学言論情報学部との合同授業

3. 韓国における環境デザインの今

『環境デザイン』というテーマで、韓国環境デザインの第一線で活躍する金賢善教授（弘益大学校国際デザイン大学院）の講義を通して環境デザインの学びの時間を持つことができました。ヒト・モノ・バの関係づくりに加え、トキとコトづくりの概念が加わった最新の概念を示してもらいました。さらに、KHSDESIGNでは、環境デザインのプロセスについてさまざまな事例を通して、社会的問題への解決策としての環境デザインの取り組みについて体験体感することができた。サービスデザイン技法を用いる公共デザインや、デザインプロセスの一部として防犯に焦点を当て、人の活動を促進するデザインによる防犯手法を提示することで、より安心安全な都市生活環境づくりに貢献することを目的とし、防犯まちづくりの方向性などのデザインの実例などをプレゼンしていただいた。

4. 伝統と現代の共存に向け

ソウルの代表的な故宮である「景福宮」を視察した。政治の場として建立された景福宮と民俗博物館を訪問し、朝鮮時代の生活に対する考え方や様子などが理解できる体験となった。朝時代の正宮である、景福宮と昌徳宮、宗廟に囲まれた「北村韓屋村」は、朝鮮時代（1392～1910）から残る韓国の伝統家屋「韓屋」が密集するエリア。朝鮮時代に王族や両班と呼ばれた当時の貴族たちが住んでいた、歴史の面影を色濃く残している地域であるが、近年、地下鉄3号線安国駅の北側に広がる齋洞、桂洞、嘉会洞には、1点ものの作品が並ぶ個性的なショップや、ほっこりくつろげるおしゃれなカフェなどが立ち並び、歴史と現代が共存するこのエリアとなっている。伝統というありようを現代における見え方、見せ方を改めて考えることの大切さを実感することができた。

おわりに

本年度における「北東アジア環境共生プロジェクト」のソウル研修は、大学間の学生交流を通じて、日韓の現在と未来のあるべき姿を見出すことがテーマであった。また、そのために現地での合同授業や講義、交流会などを通じて、日韓両国が抱える共通の課題を理解しながら、積極的にコミュニケーションを図ろうとする学生たちの姿勢を導き出すことができたのが本研修の最大の成果と考える。日本とは異なる国のあり方を論理で理解するという限界を超えて、その物理的制約を取り払った直接体験を通じて身に付けた知識や認識、そして感性は、急変する北東アジア社会の未来を担う若者世代に対して、日本の大学教育が継続的に提供していくべき体験学習の貴重な場でもある。その意味で、北東アジア共同体という切り口から、学際的なアプローチに基づく体験を可能にしている本プロジェクトは今後においてもその内容を充実させながら、今後においてもその成果と意義を継続させるためのさらなる努力が必要であると感じた。



資料3 事例：CPTED 基本モジュールデザイン設置案



資料4 伝統と現代の共存サーベイ：北村韓屋村から